

キスリング展

エコール・ド・パリの巨匠

Kisling,
Grande Figure de l'Ecole de Paris

北海道立近代美術館 9:30~17:00(入館は閉館の30分前まで)

[主催]北海道立近代美術館、STV札幌テレビ放送、北海道新聞社 [後援]在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本、札幌日仏協会／アリアンス・フランセーズ、札幌国際プラザ、北海道、札幌市、札幌市教育委員会 [協力]エールフランス航空、STVラジオ、北海道ドレスメーカー学院 [企画協力]プレントラスト

AIRFRANCE



— ごあいさつ —

今から100年前のパリで時代の寵児として一世を風靡したキスリング (1891-1953) は、エコール・ド・パリ (パリ派) を代表する画家です。ポーランドの古都クラクフに生まれたキスリングは、1910年に芸術の都パリに赴きました。キュビズムなど新しい絵画運動に触れ、ピカソやモディリアーニ、藤田嗣治らと交友しながら独自の画風を模索しています。1918年に第一次世界大戦が終結して、パリでは多彩な文化が咲き誇る華やかな“狂騒の時代”の幕が開きました。1919年の秋、キスリングはパリで初めての個展を開き、個性的なスタイルが高く評価されています。そして1920年代、華麗な色彩を駆使した哀感漂う作品は広く人気を博し、エコール・ド・パリの仲間のなかでも最も早く成功を収めた画家となりました。

キスリングは、肖像画など西洋絵画の伝統に新たな息吹を与えた画家として、20世紀の絵画史で異彩を放つ存在です。前衛の洗礼を受け古典にも学んだユニークな作風には、ルーツである東欧風のエキゾティックな情趣が沁みわたります。キスリングなどエコール・ド・パリの芸術家の多くはユダヤ系でした。第二次大戦時、キスリングはユダヤ人を迫害するナチスに対して抵抗運動を行うなど、激動の時代を力強く生き抜き画家としての人生を全うしています。このたびの展覧会はわが国で12年ぶりの回顧展であり、パリ市立近代美術館やジュネーヴのプティ・パレ美術館など海外の美術館をはじめ、国内の美術館や個人所蔵の名作の数々が一堂に展示されます。

本展の開催にあたり、多大なるご尽力を賜りましたポール・ヴァレリー美術館館長のマイテ・ヴァレス=ブレッド様、貴重なご所蔵品を快くご出品賜りましたフランスやスイス、日本の美術館ならびに所蔵者の皆様方に対しまして、心より厚く御礼申し上げます。またご後援を賜りました在日フランス大使館、アンスティチュ・フランセ日本、エールフランス航空をはじめご協力を賜りました関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

主催者

番号	作品名	制作年(西暦)	技法・素材	寸法(cm)	所蔵者
1910-1940 キスリング、エコール・ド・パリの主役					
1	ひげの男の肖像	1912	油彩、カンヴァス	56.0 x 47.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
2	水差しと果物のある静物	1912	油彩、カンヴァス	59.0 x 72.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
3	カフェ・ド・ラ・ロトンド	1912	水彩、紙	25.0 x 34.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
4	ルシヨンの風景	1913	油彩、カンヴァス	65.0 x 80.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
5	ジロン氏の肖像	1913	油彩、カンヴァス	100.0 x 81.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
6	青い花瓶のある静物	1914	油彩、カンヴァス	73.0 x 92.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
7	果物のある静物	1914	油彩、カンヴァス	65.0 x 81.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
8	サン＝ジェルマン風景	1914	油彩、カンヴァス	92.0 x 73.0	北海道立近代美術館
9	レオポルド・ズボロフスキーの肖像	1916	油彩、カンヴァス	65.0 x 54.0	個人蔵、パリ 協力：バンジャマン・セバン画廊、ブリュッセル
10	ヤシの木の下で	1917	油彩、カンヴァス	65.2 x 54.1	ロジェ・キリオ美術館、クレルモン・オーヴェルニュ・メトロポール
11	サン＝トロベ風景	1917	油彩、カンヴァス	46.0 x 54.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
12	果物を載せた皿	1917	油彩、カンヴァス	29.4 x 38.1	グルノーブル美術館
13	サン＝トロベ	1918	油彩、カンヴァス	46.0 x 55.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
14	瓶とグラスのある静物	1918	油彩、カンヴァス	61.0 x 50.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
15	サナリー	1919	油彩、カンヴァス	60.0 x 73.0	個人蔵 協力：リュシアン・クリフ画廊
16	牡丹	1919	油彩、カンヴァス	55.0 x 46.0	ロジェ・キリオ美術館、クレルモン・オーヴェルニュ・メトロポール
17	花	1919	油彩、カンヴァス	60.0 x 50.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
18	果物のある静物	1920	油彩、カンヴァス	73.0 x 100.0	個人蔵、日本 協力：ギャルリーためなが
19	ルネ・キスリング夫人の肖像	1920	油彩、カンヴァス	73.7 x 54.6	名古屋市美術館
20	女の肖像	1921	油彩、カンヴァス	73.0 x 54.0	ゲレ美術考古学博物館
21	花	1922	油彩、カンヴァス	64.9 x 50.2	サトエ記念21世紀美術館
22	籠、パイナップル、リンゴ、メロン	1922	油彩、カンヴァス	100.0 x 81.0	北海道立近代美術館
23	魚の静物	1924	油彩、カンヴァス	81.0 x 100.0	北海道立近代美術館
24	赤い服の女	1925	油彩、カンヴァス	99.6 x 73.0	鹿児島市立美術館寄託
25	女性像	1926	油彩、カンヴァス	73.3 x 54.8	サトエ記念21世紀美術館
26	ル・ベック氏の息子	1926	油彩、カンヴァス	100.0 x 73.0	熊本県立美術館
27	ミショー嬢の肖像	1927	油彩、カンヴァス	93.0 x 66.0	ナーマッド・コレクション
28	マリタ・アーゼンクレヴァーの肖像	1927	油彩、カンヴァス	65.0 x 50.0	ナーマッド・コレクション
29	緑色のスカートの女性	1928	油彩、カンヴァス	100.0 x 82.0	村内美術館
30	肖像	1928	油彩、カンヴァス	73.0 x 54.0	個人蔵 協力：リュシアン・クリフ画廊
31	モンバルナスのキキ	1925	油彩、カンヴァス	73.0 x 100.0	みぞえ画廊
32	晴着の婦人	1925	油彩、カンヴァス	73.0 x 60.0	北海道立近代美術館
33	オランダの娘	1928	油彩、カンヴァス	100.4 x 73.4	北海道立近代美術館
34	ルーマニアの女	1929	油彩、カンヴァス	81.2 x 64.4	公益財団法人ひろしま美術館
35	ジブシーの女	c. 1929-30	油彩、カンヴァス	73.0 x 60.0	フランス国立造形芸術センター オルレアン美術館寄託
36	赤毛の女	1929	油彩、カンヴァス	100.0 x 73.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
37	トゥーロンの若者	1930	鉛筆、紙	40.0 x 30.0	個人蔵、フランス 協力：ギャルリー・ド・ラ・プレジダンス、パリ
38	果物のある静物	1932	油彩、カンヴァス	81.0 x 100.0	ブティ・パレ美術館／近代美術財団、ジュネーヴ
39	ベル＝ガズー(コレット・ド・ジュヴネル)	1933	油彩、カンヴァス	160.0 x 110.0	カンティーニ美術館、マルセイユ
40	スカーフを巻いた金髪の少女	1934	油彩、カンヴァス	41.0 x 33.0	ジャック・ベラン・コレクション 協力：ダニエル・マラング画廊、パリ
41	タマリス	1935	油彩、カンヴァス	38.0 x 55.0	ナーマッド・コレクション
42	花	1928	油彩、カンヴァス	92.0 x 65.0	岐阜県美術館
43	花	1933	油彩、カンヴァス	55.0 x 38.0	サトエ記念21世紀美術館
44	花	1933	油彩、カンヴァス	38.1 x 55.1	サトエ記念21世紀美術館
45	花	1934	油彩、カンヴァス	125.0 x 95.0	個人蔵 協力：リュシアン・クリフ画廊
46	ポピー	1934	油彩、カンヴァス	46.2 x 38.2	サトエ記念21世紀美術館

番号	作品名	制作年(西暦)	技法・素材	寸法(cm)	所蔵者
47	カーテンの前の花束	1937	油彩、カンヴァス	73.0 x 60.0	村内美術館
48	アネモネ文花器 作:マリウス＝エルネスト・サビノ	1920s	ガラス:型吹き	径23.0 x 高さ18.8	北海道立近代美術館
49	花器・いばら 作:ルネ・ラリック	1921	ガラス:型吹き	径12.0 x 高さ23.0	北海道立近代美術館
50	ランプ 作:ミュレル兄弟	c. 1920	ガラス、鉄:ヴィトリフィカション	奥行13.0 x 幅42.0 x 高さ53.0	北海道立近代美術館
51	花文花器 作:シュネデル工房	c. 1920	ガラス:被せガラス、斑文装飾、エッチング、エングレーヴィング	径13.5 x 高さ36.0	北海道立近代美術館
52	花文水差し 作:シュネデル工房	1920s	ガラス:被せガラス、エッチング	径20.0 x 高さ32.1	北海道立近代美術館
53	幾何文花器 作:シュネデル工房	1920s	ガラス:斑文装飾、被せガラス、エッチング	径21.0 x 高さ58.5	北海道立近代美術館
54	座った裸婦	1925	油彩、カンヴァス	81.0 x 60.0	西宮市大谷記念美術館
55	裸婦	1926	油彩、カンヴァス	73.5 x 54.8	北海道立近代美術館
56	座る若い裸婦	1932	油彩、カンヴァス	73.0 x 54.0	熊本県立美術館
57	女の肖像	c. 1935	油彩、カンヴァス	35.0 x 27.0	個人蔵、フランス 協力:ギャルリー・ド・ラ・プレジダンス、パリ
58	赤い長椅子の裸婦	1937	油彩、カンヴァス	96.0 x 146.0	パリ市立近代美術館
59	長椅子の裸婦	1938	油彩、カンヴァス	81.0 x 136.0	個人蔵、アメリカ
60	スザンナ 作:ルネ・ラリック	型: 1925	ガラス:型押し	奥行5.5 x 幅18.6 x 高さ22.8	北海道立近代美術館
61	タイス 作:ルネ・ラリック	c. 1930s	ガラス:型押し	奥行5.5 x 幅19.0 x 高さ21.5	北海道立近代美術館
62	小像・フロレアル 作:ルネ・ラリック	型: 1942	ガラス:型押し	奥行4.8 x 幅4.8 x 高さ8.4	北海道立近代美術館
63	トゥーロンの港	1937	油彩、カンヴァス	33.0 x 41.0	トゥーロン美術館、フランス
64	若い娘の肖像	1938	油彩、カンヴァス	41.0 x 33.0	個人蔵、フランス 協力:ギャルリー・ド・ラ・プレジダンス、パリ
65	立葵	1939	油彩、カンヴァス	73.0 x 60.0	個人蔵 協力:リュシアン・クリフ画廊
66	マルセイユの港	c. 1940	油彩、カンヴァス	73.0 x 54.0	パリ市立近代美術館
67	マルセイユ	1940	油彩、カンヴァス	55.0 x 73.0	プティ・パレ美術館/近代美術財団、ジュネーブ
1941-1946 アメリカ亡命時代					
68	ブルターニュの女	1943	油彩、カンヴァス	62.6 x 50.5	一般財団法人 陽山美術館 協力:ギャルリー・ためなが
69	マドレーヌ・ルポーの肖像	1943	油彩、カンヴァス	41.0 x 33.0	個人蔵、フランス 協力:ギャルリー・ド・ラ・プレジダンス、パリ
70	褐色の髪の若い娘	1943	油彩、カンヴァス	33.0 x 24.0	個人蔵 協力:リュシアン・クリフ画廊
71	ミモザ	1945	油彩、カンヴァス	72.0 x 92.0	大分県立美術館
72	肖像画	1946	油彩、カンヴァス	41.0 x 33.0	個人蔵 協力:エドゥアール・マラン画廊
73	ミモザの花束	1946	油彩、カンヴァス	73.5 x 60.0	パリ市立近代美術館
74	褐色の髪の女	c. 1946	油彩、カンヴァス	41.2 x 27.2	グレンノーブル美術館
1946-1953 フランスへの帰還と南仏時代					
75	ミモザ	1948	油彩、カンヴァス	30.0 x 25.0	個人蔵、フランス 協力:ギャルリー・ド・ラ・プレジダンス、パリ
76	ツーロン	1949	油彩、カンヴァス	46.1 x 55.2	世田谷美術館
77	金髪のモデル	c. 1950	油彩、カンヴァス	73.1 x 53.9	ロジェ・キリオ美術館、クレルモン・オーヴェルニュ・メトロポール
78	姉妹	1950	油彩、カンヴァス	130.0 x 89.0	DIC/川村記念美術館
79-1	バンドロールのロゼ	1952-53	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-2	マルセイユの女	1952-53	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-3	若いジプシー	1952-53	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-4	サン＝トロペ	1952-53	ポショワール・紙	43.0 x 52.0	個人蔵
79-5	プロヴァンス風景	1953	ポショワール・紙	43.0 x 52.0	個人蔵
79-6	一本の松	1952-53	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-7	魚のある静物	1952-53	ポショワール・紙	43.0 x 52.0	個人蔵
79-8	イヴ	1952-53	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-9	裸婦と装飾	1952-53	ポショワール・紙	43.0 x 52.0	個人蔵
79-10	フルスタンバール広場	1951	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-11	裸婦(プロヴァンスのモデル)	1952-53	ポショワール・紙	52.0 x 43.0	個人蔵
79-12	ラ・ロトンド、狂騒の時代	1952-53	ポショワール・紙	43.0 x 52.0	個人蔵

※特に表記のない寸法は縦×横。

キスリング展用語解説

●エコール・ド・パリ(パリ派) 仏:École de Paris

20世紀初頭から第一次世界大戦期、とりわけ1920年代のパリで活躍した外国人芸術家たちを指す。キュビズムなど特定の様式や芸術運動を共有したわけではなく、それぞれが独自の表現様式をもっていた。印象派の登場から第二次世界大戦まで、芸術の国際的中心地であるパリに集まった多くの外国人芸術家たちは批評家や画商のサポートを受けながら活動した。シャガール、キスリング、パスキン、モディリアーニや藤田嗣治らが著名。なお、この呼称は美術評論家ロジェ・アラールが1923年に『ラ・ルヴュ・ユニヴェルセル』誌で最初に使用したとされる。

●エコール・フランセーズ 仏:École Française

エコール・ド・パリにはユダヤ系のキスリングをはじめ、多くの外国人作家がいた。1920年代のフランス国内では、戦時にくすぶっていた国粋主義の感情が高まり、ユダヤ人を含む他民族に対する排他的論調が増大していた。その帰結として、フランスの保守的批評家たちは視覚芸術におけるフランスの伝統という概念を再定義し、改めて主張する機運が盛り上がった。その結果、ドランやヴラマンクらフランス出身の作家たちを「エコール・フランセーズ」と呼び、パリに住む外国人作家を多く含んだ「エコール・ド・パリ」と区別して用いられた。

●アンデパンダン展 仏:salon des artistes indépendants

フランス国家の主催するサロンのアカデミズムと権威主義に反発するスーラ、シニャックらにより、1884年5月パリでアンデパンダン美術協会(独立芸術家協会)が設立された。同展は審査を介さず、会費を払えば誰でも無審査で出品でき、授賞の制度もない。キスリングは1913年に初めて同展に3点を出品し、1925年までに計4回出品した。しかし、シニャックがそれまでアルファベット順で作品を展示していたのに対して、1924年から国籍ごとの作品展示に変更したため、この決定に反対したキスリングはレジェや藤田嗣治らとともに同年の出品を拒否した。

●サロン・ドートンヌ 仏:salon d'Automne

パリで毎年秋に開催される公募展。1903年10月、サロンの保守性、アンデパンダン展の自由な風潮に対抗し設立されたもので、前衛的傾向を追求するサロンとして位置づけられている。1905年にはドランやヴラマンクらが出品し、フォーヴィスムが誕生したことで有名。1908年にはブラックが参加し、キュビズムが誕生する契機となった。前衛的な若い芸術家の作品発表の場であったと同時に、革命的な役割を果たした画家たちの回顧展も開催した。キスリングは1912年に初出品し、連隊の乗組員に召集される前年の1938年まで同展に出品を重ねた。

●サロン・デ・テュイルリー 仏:salon des Tuileries

1923年に組織されたフランスの美術展。毎年秋パリで絵画と彫刻の展覧会を開催しており、1962年まで続いた。設立時の出品者はスゴンザックやヴラマンクなど。同展は設立当時流行していた非具象・抽象的動向に対して、具象あるいはネオ・レアリズムのような保守的傾向を示した。キスリングをはじめシャガールや藤田嗣治など多くの外国人作家は国別の展示方法に変更された1924年のアンデパンダン展への出品を拒否し、本展に出品。具象的傾向を顕著にしていたキスリングに同展の理念はふさわしく、1923年から1933年の間に計4回出品した。

●キュビズム 仏:le cubisme

20世紀初頭、セザンヌの「形態」に対する主張に影響を受けたブラックやピカソが創始した芸術における革新運動およびその手法。キュビズムの動向は一般に、対象を細分化して構築する「分析的キュビズム」、前者において細分化された対象の形態を再び統合する「総合的キュビズム」の2段階に分けられるが、第一次世界大戦勃発とともに終焉を迎えた。

キスリングはピカソとキュビズムについて論争したが、キュビズム運動には参加しなかった。しかし、初期作は対象を理知的に分析して画面を構築するなど、その確かな影響がうかがえる。